

## 第34回 宇宙科学・探査小委員会 議事要旨

1. 日時：令和元年11月25日（月） 16:00-17:50

2. 場所：宇宙開発戦略推進事務局大会議室

3. 出席者

(1) 委員

松井座長、大島委員、関委員、竝木委員、永原委員

(2) 事務局（宇宙開発戦略推進事務局）

行松審議官、星野参事官、中里参事官、森参事官

(3) 関係省庁等

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課

藤吉課長

倉田室長

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）

國中理事

宇宙科学研究所

藤本副所長

国際宇宙探査センター

佐々木センター長

4. 議事要旨

(1) 米国提案による国際宇宙探査への日本の参画について

JAXAから資料1を用いて説明があった。

委員からは、以下のような意見があった。

（○：意見等 ●：事務局・文部科学省・JAXAからの回答）

○科学的検討が今しばらく続く中、来月に予定される工程表の改訂の中に矛盾する記載がないように留意されたい

●承知。年末までにまとめたうえで、年明けには報告する予定。

(2) 宇宙基本計画工程表の改訂について

JAXAから資料2を用いて、また、事務局より資料3を用いて説明があった。

委員からは、以下のような意見があった。

（○：意見等 ●：事務局・文部科学省・JAXAからの回答）

（月極域探査）

○月極域探査をインドと協力する際には、きちんと情報が日本側に公開されるか。

●これまで丁寧に情報共有がなされている。今後、協力文書の作成等を通じて、情報共有の枠組みを整えたい。

○水資源の獲得等の活動は、各国で分担や強みの持ち寄りが議論されるべきと考える。ISEF2の次はあるのか。

●ISEF3は時期未定なるもヨーロッパが主催予定。宇宙機関間では（ISECGの場で）意見交換をし、役割分担の検討を進めている。

○コミュニティの検討（議題1）の結果が出なければ、月利用のメリット・デメリットは整理できないのではないかと。

●コミュニティの検討が上がってきたら一層検討を深めたいが、本日は、総論として異論ないであろう範囲で報告しているもの。

○アカデミアで月極域探査の意義は見出されているのか。

●月に水があるかどうかを調べることの意義として、資源利用の可能性等で説明されている。

○米国等先行する他国の月極域ミッションとの関係を整理し、戦略的な分担や協力を検討すべきではないか。

○インドとの具体の調整状況は。

●前回説明のとおり。センサの日本担当部分、共同開発部分、といったレベルでは整っている。共同開発の更なる内訳を決めるまでは至っていない。

○「2020 年内に開発着手」と年限を区切る必要はなく、また、「インド等との協力による月極域表面移動探査機」というのも探査機自体は日本が担当するのであればミスリードになるのではないかと。

（放射線環境）

○6か月中に太陽フレアが3回、4回起こるというケースもあるが、放射線環境評価ではどう考えているか。

●原則、フレア活動を1回経験した飛行士は、すぐさま地球に帰還することを想定している。

（その他）

○はやぶさ2の初期分析についても盛り込むべき。

○10年間の工程表を設定すると、計画策定から5年経てば5年先までしか見通せない。より良い工程表の形式の在り方も、宇宙基本計画の改訂の議論の中でも検討いただきたい。

（3）宇宙基本計画の改定に向けて

各委員から意見の発表があった後、自由討議を行った。

委員からは、以下のような意見があった。

（○：意見等 ●：事務局・文部科学省・JAXAからの回答）

○宇宙人材の育成強化が重要。他方で、宇宙に特化した人材育成プログラムというのは予算等の構造上作るとは難しいのではないかと。

●宇宙政策委員会は宇宙に特化した視点で議論を進める特殊な委員会。具体的な提案があれば、実現に向けて検討を深めれば良い。

○人材育成は10年スパンで検討されるべき内容。

●これまで宇宙基本計画の中でも人材育成に関する記載や取組は薄かったので、充実を検討するのも良い。

●大学や研究機関からも、必要性の声を上げてほしい。

以 上